

災害支援ナースが直面する支援活動上の困難に関する
文献レビュー

Literature Review on the Disaster Support Nurses Face in Their Dispatch Activities

勝沼志保里¹⁾, 松尾香織²⁾Shihori KATSUNUMA¹⁾, Kaori MATSUO²⁾

1) 宮城大学看護学群, 2) 東京保健医療大学和歌山看護学部

1) School of Nursing, Miyagi University

2) Wakayama Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

【キーワード】

災害支援ナース, 支援活動, 困難
Disaster support nurse,
Dispatch activities, Difficulty

【Correspondence】

勝沼志保里
宮城大学看護学群
katsunumas@myu.ac.jp

【Support】

【COI】

本研究に関して, 開示すべき利益相反関
連事項はない。

Received 2024.05.31

Accepted 2024.07.19

Abstract

This study aims to identify the difficulties faced by disaster support nurses dispatched to disaster-stricken areas during dispatch activities. Ichushi-Web (version 5) and CiNii were searched using the keyword "disaster support nurses" for articles published in Japan from 1995 to 2023. Additionally, the websites of the Japanese Nursing Association and prefectural nursing associations were searched for reports on disaster support nurses' activities. Subsequently, 51 articles and reports were selected for analysis. Regarding difficulties faced by these nurses during their activities, 12 categories were extracted. The items before dispatch were as follows: "Preparation of supplies and mental preparedness with limited time and informations," and "Inadequate understanding of their dispatch on the part of their institution and family members." Items during the activities were: "Roles that were not clearly defined and activities that they had not expected," "Autonomous nursing practices with limited duration and resources," "Reconciling autonomous work with the requirements in the field," "Understanding the roles and collaboration of multiple professions," "Taking care of yourself mentally and physically while working in a harsh environment," "Reducing the workload of local nursing staff," "Engaging with survivors," and "Providing nursing care to meet the changing needs of disaster survivors." Items after returning home were: "Reflecting and evaluating one's own dispatch activities," and "Caring for their own body and mind after returning home." Disaster support nurses engage perform activities in disaster areas after receiving dispatch requests and continue to experience difficulties even after returning home. Nurses must strive to improve their practical nursing skills to reduce physical and mental hardship experienced during relief activities. They must also improve their self-care skills to prevent the deterioration of their mental and physical condition.

はじめに

日本の災害医療体制は、1995年の阪神・淡路大震災を契機に整備され、充実強化が図られている。災害看護においても「災害時支援ネットワークシステム」が構築され、日本看護協会と都道府県看護協会が相互に連携し、被災地県看護協会の要請に応じて「災害支援ナース」が派遣されている。災害支援ナースとは、「看護職能団体の一員として、被災した看護職の心身の負担を軽減し支えるように努めるとともに、被災者が健康レベルを維持できるように、被災地で適切な医療・看護を提供する役割を担う看護職のことであり、都道府県看護協会に登録されている者」（日本看護協会、2014）である。2021年3月末時点の災害支援ナースの登録者数は10,251人であり（厚生労働省、2023）、2011年の東日本大震災や2016年の熊本地震、2024年の能登半島地震等でも派遣されている（日本看護協会、n.d.）。派遣期間は発災後3日以降から1ヶ月を目安とし、原則として移動時間を含む3泊4日である。災害支援ナースの活動はボランティアとして位置づけられ、派遣形態は所属施設により出張や休暇取得と異なるため、個々の経費負担や事故補償が課題となっていた。2024年4月1日より、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律などの一部を改正する法律」（令和4年法律第96号）（以下、改正医療法とする）に基づき、災害支援ナースは「災害・感染症医療従事者」に位置づけられた。これに伴い、災害支援ナースは国に登録され、都道府県の要請を受けて派遣元の医療機関の職員として看護業務に従事する（業務扱い）こととなった。このように、近年の災害支援ナースの役割や活動の場は広がっており、社会からの期待が高まっている。

災害支援ナースの看護支援活動は「自己完結型」を基本とし、看護支援活動を遂行するために必要な物事を自らが責任を持ち、派遣前の準備から被災地での危機管理や看護実践、帰還後の活動まで自律した判断と行動が求められる。しかしながら、被災地で活動する災害支援ナースは、特殊な環境下での被災者のニーズへの対応や平時とは異なる看護実践に戸惑いや困難を抱えている（野口他、2017）。災害支援に携わる看護職は自身の支援活動に葛藤や無力感を抱えやすく、帰還後も不眠や気分の落ち込み、活動の振り返りの恐怖、被災者への申し訳なき等のストレス反応が見られ、日常生活への影響も生じている（西野他、2016）。東日本大震災で派遣された災害支援ナースのアンケート調査では、帰還後に身体の不調を感じていた者は28.8%であり、不調の継続期間は「3日以下」が41.1%と最も多く、「31日以上」は7.1%いたことが報告されている。また、精神の不調を感じた者は23.4%であり、「3日以下」が26.2%、「31日以上」が25.5%と報告されている（内山、2012）。伊藤他（2017）は、自責の念に駆られた看護職は次の災害発生時に活動する意欲や自信が持てず、被災地での経験を活かせなくなると述べている。このように、災害支援ナースの被災地での支援活動には困難を伴い、帰還後も心身の負担が生じているが、派遣前から帰還後までの心身の負担に応じた支援体制は十分ではない。そのため、災害支援ナースの派遣前から帰還後までの支援活動において直面する困難を把握し、今後の災害派遣に伴う心身の負担の軽減に向けた必要な備えと支援体制の整備を検討する必要がある。被災地で支援活動を行う災害支援ナースの派遣要請時から帰還後までの活動において直面する困難を明らかにすることは、今後の災害支援ナースの支援活動に必要な備えの示唆を得ることができる。

目的

本研究の目的は、災害発生時に被災地に派遣される災害支援ナースが、派遣要請を受けてから帰還後までの支援活動において直面する困難を明らかにし、必要な備えの示唆を得ることである。

用語の定義

困難とは、災害支援ナースが派遣要請時から帰還後までの活動において、円滑に支援活動ができなかった、活動する上で困ったと感じたこととする。

研究方法

1. 文献の検索方法

医学中央雑誌 Web 版 ver5, CiNii Research を用いて、1995 年から 2024 年 3 月 31 日までに発表された国内文献を対象に検索した。検索キーワードは「災害支援ナース」とし、検索条件を「会議録を除く」とした。その結果、医学中央雑誌 Web 版では 56 件、CiNii では 47 件の計 103 件が該当した。重複している文献を除き、実際に被災地で活動した災害支援ナースが直面した困難について記述がある 25 件を分析対象とした。加えて、日本看護協会及び 47 都道府県看護協会のウェブサイトを検索し、入手できた災害支援ナースの活動報告の 26 件も分析対象とした。

2. 分析方法

分析対象文献の 51 件をマトリックス方式に基づき整理した。文献を精読し、災害支援ナースが直面した支援活動上の困難が表れている記述を抽出し、要約してコード化した。記述が抽象的で意味内容が不明瞭の場合は意味内容がわかる具体的な説明や語りも抜粋した。共通性・相違性に基づき、サブカテゴリ化、カテゴリ化した。なお、研究過程において共同研究者間で内容の解釈やデータの分類を検討し、信用可能性の確保に努めた。

3. 倫理的配慮

使用する文献や報告書からの引用の際は、著者、タイトル、出典、発行年、ページ数を明記し、著作権保護に努めた。

結果

1. 文献の概要

分析対象文献の概要を表 1, 表 2 に示す。災害の種類は、地震 46 件、水害 5 件であった。災害支援ナースの活動場所は、記載のない文献もあったが避難所（福祉避難所や自主避難所も含む）が最も多く、その他に病院や災害ボランティアセンターもあった。

2. 災害支援ナースが直面する支援活動上の困難

災害支援ナースが直面する支援活動上の困難は、201 コード、41 サブカテゴリ、12 カテゴリが抽出された（表 3）。結果は、1) 派遣要請を受けてから被災地で活動を開始するまでの時期（派遣前）、2) 被災地で支援活動を行う時期（活動中）、3) 被災地から帰還した後の活動を行う時期（帰還後）に分類して述べる。以下、カテゴリは【 】, サブカテゴリは< >, コードは「 」, 文献番号（ ）で表記する。

1) 派遣前

(1) 【限られた時間や情報の中での物品準備や心構え】

派遣要請から決定までの期間に、派遣先の被災状況などの情報が十分に得られない中で不安を抱えながら準備することの困難を表し、6 サブカテゴリから構成された。災害は突然に起こり、その被害状況は時間経過とともに明らかになるため、被災地看護協会からの派遣要請や日本看護協会による派遣調整は迅速に行われる。災害支援ナースは「自分が思っていたよりも遠い地域への急な派遣要請に戸惑う (6)」というように、<急な派遣に対する心構え>が求められていた。また、「自分に何ができるのか、役に立たないのではないかという思いが頭の中を駆け巡っていた (17)」という<自分に何ができるのか不安を抱えながらの派遣>であった。派遣前の情報収集では「派遣時期や派遣先の状況が分からず不安を感じる (6)」、「現地の医療活動の情報が得られない (11)」など、<派遣先や現地の情報の入手>が困難であったため、「限られた情報の中で自身にできることや準備すべきことを考え行動するしかなかった (9)」というように、<派遣準備を行う上での自己判断>にも困難を感じていた。さらに、大規模災害時は物流の途絶や遅滞があり、「アルファ米や充電器が品切れで入手が難しかった (24)」など、<派遣直前の必要物品の入手>が難しいことや、「マニュアルと実際に看護協会が準備してくれる物に違いがあった (33)」など、<派遣元の貸与物品の準備不足>もあった。

Miyagi University Research Journal

表1 分析対象の文献一覧

| 番号 | 発行年 | 筆頭著者 | タイトル | 雑誌名 | 災害の名称 |
|----|------|--------|--|--|----------------|
| 1 | 2020 | 門田 広美 | 災害支援ナースの役割と地域共助による取り組み | 社会医療研究,18,53-59 | 東日本大震災 |
| 2 | 2018 | 長見 由美 | 西日本豪雨災害からみた医療支援活動 災害支援ナースとして3つの視点で気付きを振り返る | 看護のチカラ,23(503), 38-39 | 平成30年7月豪雨 |
| 3 | 2017 | 野口 恭子 | 東日本大震災被災地へ支援のために派遣された看護師が感じた倫理課題 | 日本看護論学会誌, 9(1), 38-44 | 東日本大震災 |
| 4 | 2017 | 岡崎 敬子 | 熊本地震における亜急性期の避難所で活動した災害支援ナース活動報告 | 久留米医学会雑誌, 80(1),48-57 | 平成28年熊本地震 |
| 5 | 2017 | 鈴木 菜穂 | 平成27年9月関東・東北豪雨災害における常総市水害での災害支援ナース・JMAT(看護師)としての活動報告 | 茨城県救急医学会雑誌, 40, 46-48 | 平成27年9月関東・東北豪雨 |
| 6 | 2013 | 松清 由美子 | 東日本大震災で支援活動を展開した看護師の心理状況とその背景 | 日本災害看護学会誌, 15(2), 15-24 | 東日本大震災 |
| 7 | 2013 | 梅本 貴子 | 【東日本大震災】東日本大震災における災害支援ナース活動報告 | 鶴岡市立荏内病院医学雑誌, 23,22-25 | 東日本大震災 |
| 8 | 2012 | 松本 麗子 | 東日本大震災の被災地で感じたひとつとつなぐケアとインフェクションコントロール 災害支援ナースとして参加した感染管理認定看護師の視点 | 感染管理看護研究会誌, 1(1), 17-19 | 東日本大震災 |
| 9 | 2012 | 中川 武子 | 【東日本大震災～被災地における支援活動の体験～】宮城県における日本看護協会災害支援ナースの活動報告 現地コーディネーターとしての支援 | 九州看護福祉大学紀要, 12(1),13-19 | 東日本大震災 |
| 10 | 2012 | 大本 美加 | 東日本大震災における避難所での災害支援ナース活動報告 | 三養神戸病院誌, 2,99-101 | 東日本大震災 |
| 11 | 2012 | 鈴木 規宏 | 東日本大震災災害派遣活動に参加して | 奈良市立奈良市民病院研究誌,21(1),2-10 | 東日本大震災 |
| 12 | 2012 | 竹中 利美 | 災害支援ナースの語りから学んだ組織支援のあり方 | 全国自治体病院協議会雑誌, 51(4),597-599 | 東日本大震災 |
| 13 | 2011 | 網木 政江 | 山口県山陽小野田市豪雨災害における災害支援ナース活動報告 災害ボランティアセンター救護班班長の経験から | 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル 4(1) | 平成22年7月15日大雨災害 |
| 14 | 2011 | 日淺 千代美 | 被災地での出会いをとおして感じたこと | 師長主任業務実践：看護リーダーのための専門情報誌 16 (341), 16-23 | 東日本大震災 |
| 15 | 2011 | 平岡 敬子 | 東日本大震災における災害支援活動 | 社会情報学研究：広島文化学園大学社会情報学部紀要, 17,77-83 | 東日本大震災 |
| 16 | 2011 | 石井 美恵子 | 【被災地の安全と健康を守る(2)リスクに取り組む】被災地における災害支援ナースの活動 | 労働の科学,66(11),650-653 | 東日本大震災 |
| 17 | 2011 | 加賀爪 美佳 | 被災者の思いを傾聴し寄り添うことでこころのケアにつなげる | 師長主任業務実践：看護リーダーのための専門情報誌 16 (341), 24-28 | 東日本大震災 |
| 18 | 2011 | 真鍋 由紀美 | つなぐ | 師長主任業務実践：看護リーダーのための専門情報誌 16 (340), 38-42 | 東日本大震災 |
| 19 | 2011 | 松浦 志野 | 【災害と情報】被災地への支援と情報 地震当日から災害支援ナース派遣までの1ヵ月間、経験し、感じ、考えたこと | インターナショナルナースingleビュー,34(5),41-43 | 東日本大震災 |
| 20 | 2011 | 森下 幸子 | 【東日本大震災の経験を共有する】災害支援ナースの実践 避難所の環境調査 | 看護技術, 57(12),119-124 | 東日本大震災 |
| 21 | 2011 | 中川 武子 | 【東日本大震災】消費期限切れ食品の回収作業を通した食中毒予防活動 宮城県石巻市内の避難所における災害支援ナースによる一考察 | 日本健康教育学会誌, 19(3),229-238 | 東日本大震災 |
| 22 | 2011 | 野崎 加世子 | 【災害と地域ケア】震災1か月後の避難所支援 日本看護協会災害支援ナースとして | 訪問看護と介護,16(9),738-741 | 東日本大震災 |
| 23 | 2011 | 高田 真美 | 被災支援第一陣として | 師長主任業務実践：看護リーダーのための専門情報誌 16 (340), 35-37 | 東日本大震災 |
| 24 | 2011 | 塚本 能尚 | 災害支援活動 石巻小学校避難所での災害支援ナースとしての活動 | 師長主任業務実践：看護リーダーのための専門情報誌 16 (339), 4-11 | 東日本大震災 |
| 25 | 2010 | 廣岡 雅美 | 新潟県中越沖地震災害支援ナース活動報告 | 県西部浜松医療センター学術誌, 4(1),125-128 | 新潟県中越沖地震 |

表2 分析対象の活動報告書一覧

| 番号 | 報告年 | 看護協会 | 報告者 | タイトル | 報告書名 | 災害の名称 |
|----|------|---------|---------|----------------|----------------------------|-------------|
| 26 | 2024 | 福井県看護協会 | 入羽 美緒 | 災害看護支援ナース活動報告書 | 能登半島地震での災害支援ナースの活動報告書 | 能登半島地震 |
| 27 | 2024 | 兵庫県看護協会 | 福永 千絵美 | 災害看護支援ナース活動報告書 | 能登半島地震での災害支援ナースの活動報告書 | 能登半島地震 |
| 28 | 2024 | | 前田 恵子 | 災害看護支援ナース活動報告書 | 能登半島地震での災害支援ナースの活動報告書 | 能登半島地震 |
| 29 | 2018 | | リーフレット | 災害看護支援ナース活動報告書 | 平成30年7月豪雨災害での災害支援ナースの活動報告書 | 平成30年7月豪雨 |
| 30 | 2017 | 福岡県看護協会 | リーフレット | 災害看護支援ナース活動報告書 | 九州北部豪雨災害での災害支援ナースの活動報告書 | 平成29年九州北部豪雨 |
| 31 | 2016 | | リーフレット | 災害看護支援ナース活動報告書 | 平成28年熊本地震での災害支援ナースの活動報告書 | 平成28年熊本地震 |
| 32 | 2011 | | 長谷川 郁 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 33 | 2011 | | 五十嵐 薫 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 34 | 2011 | | 五十嵐 真由美 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 35 | 2011 | | 伊賀山 京子 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 36 | 2011 | 新潟県看護協会 | 池 良子 | 災害看護支援ナース活動報告書 | 東日本大震災での災害看護支援ナース活動報告書 | 東日本大震災 |
| 37 | 2011 | | 石川 百恵 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 38 | 2011 | | 腰越 文枝 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 39 | 2011 | | 丸山 由美子 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 40 | 2011 | | 長井 直子 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |

| | | | | | |
|----|------|-------------------|------------------------------------|----------------------------------|--------|
| 41 | 2011 | 小川 紀子 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 42 | 2011 | 大掛 陽子 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 43 | 2011 | 佐藤 真樹 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 44 | 2011 | 白井 美紀 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 45 | 2011 | 田巻 美緒 | 災害看護支援ナース活動報告書 | | 東日本大震災 |
| 46 | 2011 | 八巻 明美 | 東日本大震災災害支援ナースの活動を通して～医療者としての判断と連携～ | 東日本大震災宮城県看護協会の記録～復興への歩み～,108 | 東日本大震災 |
| 47 | 2011 | 黒澤 恵 | 災害支援ナース活動を通して | 東日本大震災宮城県看護協会の記録～復興への歩み～,112 | 東日本大震災 |
| 48 | 2011 | 宮城県看護協会 太田 恵美子 | 災害支援ナースとしての活動報告 | 東日本大震災宮城県看護協会の記録～復興への歩み～,111 | 東日本大震災 |
| 49 | 2011 | 佐藤 一恵 | 東松島市の避難所支援を経験して | 東日本大震災宮城県看護協会の記録～復興への歩み～,106-107 | 東日本大震災 |
| 50 | 2011 | 高橋 直子 | 東日本大震災での災害看護支援を経験して | 東日本大震災宮城県看護協会の記録～復興への歩み～,105 | 東日本大震災 |
| 51 | 2011 | 山田 由美 | 災害支援ナースとして派遣されて | 東日本大震災宮城県看護協会の記録～復興への歩み～,109-110 | 東日本大震災 |

(2) 【職場の人や家族の派遣への理解不足】

派遣決定時の所属施設の上司の派遣への理解不足や家族の協力が得られないことへの困難を表し、1 サブカテゴリから構成された。災害支援ナースは所属長の承諾を得て登録されるが、職場が多忙の中、上司からの言葉に「災害支援ナースの派遣に対する所属の理解が得られない(3)」と感ずることや、「派遣に対する家族の理解と協力が得られるのかが心配になる(6)」という<職場の人や家族等の周囲の派遣への理解不足>に困難を感じていた。

2) 活動中

(1) 【不明瞭な役割や想定外の活動】

災害支援ナースの役割の混乱や想定していた活動とは異なる業務や対応が求められたことへの困難を表し、2 サブカテゴリから構成された。「オリエンテーションを受けたがどのような活動に関わるのがよいか悩んだ(48)」、「短期間で指示もない中で考えながら動かなければならず、模索しながら活動した(35)」というように、<平時と異なる業務や不明瞭な役割による手探りの活動>であった。また、「市販薬を渡すことや急患の対応に看護師の業務範囲を超えていると思う(36)」災害支援ナースもあり、<看護師の業務範囲を超えていると感じる急患対応や市販薬の提供>に困難を感じていた。

(2) 【限られた期間や資源の中での看護実践の自律】

短い派遣期間かつ限られた資源の中で工夫しながら、責任もって判断・行動し看護実践を行うことの困難を表し、6 サブカテゴリから構成された。災害支援ナースは複数の人数で班をつくり派遣されることが多いが、派遣時期や人数、被災地の状況やニーズに応じて、一人で活動することもある。災害支援ナースにとって一人での活動は「前任の3人の活動を一人で引き継いで活動するプレッシャーを感じる(11)」、「一人での活動を指示され気後れしたが、現地の悲惨な状況が伝わり弱音を心の奥にしまう(49)」というように、<プレッシャーを感じる一人での活動>を困難として捉えていた。また、被災地では平時の病院の環境とは異なり医療や処置を行う環境や機器がなく、避難所に「救援物資が届いても管理者の不在や避難者数分がないことにより有効に活用できない(3)」、「支援物資が提供されても看護・介護スタッフの知識不足により効果的に活用できない(7)」など、<救援物資の効果的な活用>にも困難が生じていた。さらに、災害支援ナースは「医療機器のない中での避難者の観察は難しい(5)」、「病院とは異なり初期治療が出来ない難しさを感じた(30)」、「使用できる物が非常に限られる現状の中で最大限に工夫することの大変さを痛感した(8)」というように、<平時の病院であれば可能な身体診察や治療の提供>や<限られた資源で工夫が求められるケア>を提供することに困難を感じていた。このような状況の中で、災害支援ナースは「何もできない自分に無力さを痛感する(17)」ことや、「普段の勤務先から離れると情報や仕事は異なり、自分自身の判断が重要になると痛切に感じた(46)」など、<無力さを痛感する看護実践>や<平時と異なる状況下で判断力と行動力が求められる看護実践>として困難を体験していた。

(3) 【自己完結型の活動と現場との調和】

災害支援ナースの看護支援活動の基本である「自己完結型」の理念と現場の雰囲気や調和をとることへの困難を表し、1 サブカテゴリから構成された。災害支援ナースは「自己完結の覚悟を持っていたが避難所で提供された食事を断ることに不自然さを感じる (34)」という、＜自己完結型支援で食事提供を受けることの判断＞に困難を感じていた。

(4) 【多職種の役割理解や協働】

被災地に支援に入る災害支援ナースや多職種支援チームと情報共有し協働することの困難を表し、4 サブカテゴリから構成された。災害支援ナースの活動期間は原則3泊4日であり、「看護師チームの人数が流動的で引継ぎが難しく、高いコミュニケーション力と適応力が必要と感じた (35)」というように、＜日々変わる災害支援ナースのメンバー間での情報共有＞を困難に感じていた。また、災害支援ナースは「他の災害支援ナースの活動をしない姿勢や不適切な言動に葛藤する (12)」、「他の派遣者に苛立ちを感じる (3)」などの＜他の支援者の活動しない姿勢や態度＞にも困難を体験していた。被災地での支援活動では、「被災者の把握や短期間で交代する共に働く仲間の動きを知ることすらままにならない (19)」状況であり、＜短期間での多職種の役割と活動の理解＞が容易ではなく、「災害支援ナースのみでの活動は難しい (27)」、「限られた活動期間で円滑な支援活動を行うために、支援者間のコミュニケーションが必要であると感じた (40)」というように、＜共通認識を持ち活動を継続するための多職種連携＞にも困難が生じていた。

(5) 【過酷な環境下で活動する自身の心身のケア】

二次災害の危険や不慣れな環境下で活動する災害支援ナースの心身の負担や、使命感による自身の健康への意識の低下や対処ができない困難を表し、5 サブカテゴリから構成された。被災地では余震や津波などの＜二次災害の危険に不安や恐怖を感じながらの活動＞となる一方で、活動に集中するあまりに＜二次災害の危険への自覚と備え＞が不十分になることもあった。災害支援ナースは被災地に入ると「初めて実際に目にする被災地の被害状況に圧倒され言葉を失う (17)」、「現場で目にする惨状にショックを受け、自身の心のケアが難しかった (22)」など、＜被災地の惨状を目の当たりにした自身の心のケア＞に困難を感じていた。また、被災地への移動が「長距離移動で眠れたのかもわからないままに現地に到着した (13)」ことや、ライフラインの途絶や普段の生活を送ることができない被災地では、「不慣れで不慣れた生活環境でストレスや疲労を感じる (6)」ことから、＜長距離移動や普段と異なる活動による体力の消耗＞を体験していた。さらに、「看護師は使命感が強くいつも以上に頑張る傾向から自身の休憩や水分補給を忘れがちになる (13)」という、＜使命感による自身の健康管理への意識の低下＞を体験していた。

(6) 【現地の看護職の負担軽減】

被災した看護職の心身の負担を軽減することの困難を表し、2 サブカテゴリから構成された。＜派遣に関する連絡不足により生じた現場の混乱＞では、災害支援ナースが支援活動を開始する際に「派遣先に派遣の有無や人数の情報が正しく伝えられていなかった (3)」、「現地に連絡が行き届かず現場が混乱した (33)」ことにより現地への負担をかけたことに申し訳なさを感じていた。＜不眠不休で外部支援の対応に追われる現地の看護職の負担軽減＞では、「現地の看護師の過剰な負担を心配する (3)」、「不眠不休で働く現地保健師の休息をとるための支援が難しいと感じた (4)」困難が表された。

(7) 【被災者への関わり】

被災者への声のかけ方や、ストレス反応が見られる被災者、ケアや治療を拒否する被災者などへの対応の困難を表し、4 サブカテゴリから構成された。災害支援ナースは「被災者に返す言葉が分からず、マニュアルにある言葉さえも出てこない (20)」と、＜被災者にかける言葉と声のかけ方＞に困難を感じていた。また、「ストレス反応を表出する被災者の対応が難しい (3)」、「被災者の話を聞く時間を確保するのが難しい (6)」というように、＜ストレス反応を表出する被災者への関わり＞や「周囲への遠慮から入浴を断る高齢者や要介助者への対応に困惑する

(20)」というように、＜ケアや治療を拒否する被災者への対応＞に苦慮していた。さらに、「災害支援ナースの存在を知らない被災者に不安を抱かせる(13)」こともあり、＜被災者の災害支援ナースの認知不足＞も支援活動を行う上で困難となっていた。

(8) 【被災者のニーズの変化に応じた看護の提供】

生活環境が整っていない避難所での被災者の健康維持や刻々と変化するニーズに応じた看護ケアを提供することの困難を表し、4 サブカテゴリから構成された。災害支援ナースは、被災者の生活環境の整備や健康問題に対する看護ケアの提供の必要性を理解しながらも「避難所の様々な医療ニーズに対応しきれず戸惑った(22)」、「被災者の日々大きくなるニーズへの対応に限界を感じる(37)」など、＜限られた期間での被災者の変化するニーズへの対応＞に困難を感じていた。また、災害支援ナースは「集団生活の避難所での衛生面と利便性を考慮したトイレの設置に難しさを感じた(11)」、「集団生活や水不足により避難所の感染予防対策が難しい(3)」と感じ、＜被災者の健康維持や感染予防のための避難所の環境整備＞や、「災害サイクルに応じた避難所環境の整備と基礎疾患管理の難しさを感じた(26)」という、＜整備されていない生活環境での被災者の健康管理＞にも困難を感じていた。さらに、災害支援ナースは知識として「過度の介助により自立を妨げることを理解していても自立と支援の境界を判断することが難しい(51)」、「外部支援者にとっては避難者の自立支援への関わりが難しく感じる(45)」というように、＜被災者の自立と支援の境界の判断＞にも困難を感じていた。

3) 帰還後

(1) 【自身の支援活動の振り返りと評価】

被災地から帰還し自身の支援活動を振り返り活動を評価することの困難を表し、4 サブカテゴリから構成された。災害支援ナースは「派遣後も自身の被災者に向けた言葉が適切だったのかを考える(51)」、「自身の支援活動が正しかったのか、まだできることがあったのではないかと考えることが暫く続いた(11)」ことや、「短期間の活動の成果を見出すことが難しい(31)」ことから、＜自身の支援活動の適切性の評価＞をすることが困難と感じていた。自身の活動の振り返りや評価から、「十分な支援活動ができなかったと感じ、被災者に申し訳なさを感じる(6)」、「震災後1ヶ月が経っても被災者の食事や介護、心のケアが十分にできず申し訳なさを感じ心残りに感じる(22)」というように、＜自身の支援活動への消えない心残り＞が生じていた。さらに、「災害への対応能力や知識があればよりよい支援ができたのではないかと反省する(11)」、「災害時に適切な行動をとることができるように訓練を積む必要がある(25)」など、＜振り返り気づく自身の災害の専門的知識や対応力の不足＞があった。加えて「現地で活動する災害支援ナースが捉えるニーズと派遣元の判断にずれがある(3)」と感じており、継続の支援の必要性に対する＜災害支援ナースと派遣元の支援ニーズの把握のずれ＞を困難に感じていた。

(2) 【帰還後の自身の心身のケア】

帰還後の自身の身体的疲労の回復や心のケアを行うことの困難を表し、2 サブカテゴリから構成された。被災地での活動が終了し「帰還後にほっとし心身の疲労を感じる(6)」とともに、「自分が傷つくのではないかと思ひ、被災地での体験を自ら話す気持ちになれない(6)」、「二度と思ひ出したいくない経験となった(12)」など、＜帰還後に生じる心身反応へのケア＞の困難に感じていた。また、「所属上司の活動終了後の災害支援ナースの心理状態への理解が不足している(3)」という、＜支援者の活動後の心理状態への所属施設の理解不足＞の困難があった。

考察

1. 災害支援ナースの支援活動上の困難の特徴と必要な備え

災害支援ナースは派遣経験の有無に関わらず、災害という特殊な環境下で普段の勤務体制や業務とは異なる看護支援活動を求められることにより、多くの困難を体験していることが明らかになった。災害支援ナースの困難には、派遣に向けた準備や心構え、実際の支援活動においては見知らぬ支援者や被災者との関わり、時間や環境、資源などの制約を受けながらの看護支援活動、

表3 各時期における災害支援ナースが直面する支援活動上の困難

| 時期 | カテゴリ | サブカテゴリ |
|-----|-----------------------|---|
| 派遣前 | 限られた時間や情報の中での物品準備や心構え | 急な派遣に対する心構え |
| | | 自分に何ができるのか不安を抱えながらの派遣 |
| | | 派遣準備を行う上での自己判断 派遣直前の必要物品の入手 派遣元の貸与物品の準備不足 |
| 派遣中 | 職場の人や家族の派遣への理解不足 | 職場の人や家族等の周囲の派遣への理解不足 |
| | | 不明確な役割や想定外の活動 |
| | | 平時と異なる業務や不明確な役割による手探りの活動 看護前の業務範囲を超えている急患対応や市販薬の提供 プレッシャーを感じる一人での活動 救護物資の効果的な活用 |
| 活動中 | 限られた期間や資源の中での看護実践の自律 | 平時の病院であれば可能な身体診察や治療の提供 限られた資源で工夫が求められるケア 無力さを痛感する看護実践 平時と異なる状況下で判断力と行動力が求められる看護実践 |
| | | 自己完結型の活動と現場との調和 |
| | | 自己完結型支援で食事提供を受けることの判断 |
| 活動中 | 多職種の役割理解や協働 | 日々変わる災害支援ナースのメンバー間での情報共有 他の支援者の活動しない姿勢や態度 短期間での多職種の役割と活動の理解 共通認識を持ち活動を継続するための多職種連携 |
| | | 過酷な環境下で活動する自身の心身のケア |
| | | 被災地の惨状を目の当たりにした自身の心のケア 長距離移動や普段と異なる活動による体力の消耗 使命感により自身の健康管理への意識の低下 |
| 活動中 | 現場の看護職の負担軽減 | 派遣に関する連絡不足により生じた現場の混乱 不眠不休で外部支援の対応に追われる現場の看護職の負担軽減 |
| | | 被災者への関わり |
| | | 被災者にかかる言葉と声のかけ方 ストレス反応を表現する被災者への関わり ケアや治療を拒否する被災者への対応 被災者の災害支援ナースの認知不足 |
| 活動中 | 被災者のニーズの変化に応じた看護の提供 | 限られた期間での被災者の変化するニーズへの対応 被災者の健康維持や感染予防のための避難所の環境整備 整備されていない生活環境での被災者の健康管理 被災者の自立と支援の境界の判断 |
| | | 自身の支援活動の振り返りと評価 |
| | | 自身の支援活動への消えない心残り 振り返り気づく自身の災害の専門的知識や対応力の不足 災害支援ナースと派遣元の支援ニーズの把握のずれ 帰還後に生じる心身反応へのケア 支援者の活動後の心理状態への所属施設の理解不足 |
| 帰還後 | 自身の支援活動の振り返りと評価 | 自身の支援活動の振り返りと評価 自身の支援活動への消えない心残り 振り返り気づく自身の災害の専門的知識や対応力の不足 災害支援ナースと派遣元の支援ニーズの把握のずれ 帰還後に生じる心身反応へのケア 支援者の活動後の心理状態への所属施設の理解不足 |
| | | 帰還後の自身の心身のケア |

自身の判断と行動を求められる自律した活動、過酷な環境や不慣れな活動の中での心身の健康管理、帰還後の活動の振り返りと心身のケア等があった。派遣前の困難では、派遣準備の期間が短く、職場や看護協会との連絡・調整を行いつつ、限られた時間の中で情報収集、必要物品の準備、職場や家庭との調整を行わなければならない特徴があった。災害支援ナースの看護支援活動は「自己完結型」を基本とするため、自ら交通手段や宿泊先の確保、活動中の生活に必要なものや身を守るためのもの、看護活動を行うためのもの等を準備する必要がある。また、派遣直前に必要なものが手に入らないことや、被災地の詳細な状況の情報を得ることも困難であり、様々な状況を想定して準備することが必要である。同時に職場や家庭の調整として、派遣形態や身分保障の確認や手続き、業務の引継ぎ、家庭内役割の調整や不在時の対応を行わなければならない。このように、派遣前の準備には時間と労力を要し、十分に準備を整わないことにより不安を感じる要因になると考えられる。このことから、派遣直前の準備における心身の負担を軽減するための備えとして、平時からの派遣に必要な物品の準備・点検や、職場での派遣時に必要な手続きや対応の確認、職場の上司や同僚、家族の派遣への理解を得て派遣準備の協力を得ることができる関係性づくりが必要である。さらに、災害支援ナースは心の準備にも困難を抱えており、派遣前は心構えをつくる時間も必要になることが明らかになった。派遣前に災害支援ナースの養成研修の内容や活動要領を見返し、災害支援ナースの役割や活動の目的を自分の中に持つておくことが重要である。しかしながら、災害支援ナースの役割は被災した看護職の心身の負担の軽減と被災者の健康を支えることであることが明示されているものの、多くの災害支援ナースは実際の活動においてその役割を具体的にどのように果たしていくのかわからず困難を感じている。加えて、現場でタイムリーな自身の責任を伴う判断と行動が求められることからプレッシャーにもつながり、平時の看護実践能力を発揮することができない状況に置かれる。このため、災害支援ナースは登録に必要な養成研修や登録後のフォローアップ研修のみならず、平時から継続的に災害看護の知識や技術のアップデートし、被災地での活動のイメージを持てるように訓練を重ねていくことが必要である。被災地での活動期間においては、災害支援ナース自身の健康管理も困難になっていた。被災地での活動は生活環境も十分に整っていない状況であり、重い荷物を背負って移動

することや不慣れな環境や業務による身体的疲労も大きい。また、被災地の深刻な状況を目の当たりにし心理的衝撃を受けるため、活動中の時期は心身の負担が大きくなる。しかしながら、災害支援ナースは使命感により自身のニーズを後回しにする傾向があり、活動中の自身の心身に目を向けて対処することのセルフケア能力が求められる。平時から自身の心身のケアの具体的方法や活用できる資源を明確にし、自身の健康管理も災害支援ナースの役割や活動の一環として意識して行う必要がある。帰還後においては、心身のケアが困難となるため、心身の不調を防ぐためのセルフケアを行うとともに、一緒に活動した班メンバーや派遣元とともに活動を振り返る必要がある。災害支援ナースは“何ができたのか”と個人の活動として振り返る傾向にあるが、活動の評価（成果）は災害支援ナース全体の活動や派遣期間全体で評価されるべきである。個人による振り返りは、自身が担った活動の一側面しか見ることができず、全体の活動の中で自身が担った役割や活動がどの部分を担っていたのか、貢献していたのかを包括的に振り返ることが重要であると考えられる。また、一時点の活動のみならず活動の経過も振り返り、継続した活動の一つを担っていることを認識する必要がある。活動の振り返りや評価は自身の心のケアにも影響するため、自身の活動が全てではないことを派遣前の心の準備として認識しておく必要がある。

2. 災害支援ナースの派遣前から帰還後までの支援活動を支える体制づくり

災害支援ナースは派遣経験の有無や臨床経験に関わらず、平時の状況とは異なる特殊な環境下で普段の勤務体制や業務に従事しながら看護支援活動を求められることにより、多くの困難を体験している。災害支援ナースは、養成研修を受けて登録されているが、必ずしも全員が災害看護に精通しているとは限らず、派遣前から帰還後までの一連の過程において組織的支援が必要と考える。一つ目に、災害支援ナースの看護実践能力を向上する教育内容の検討が必要である。災害支援ナースには望まれる資質や能力として、「行動力」、「実行力」、「人間関係調整力」、「リーダーシップ」、「臨機応変の対応」、「主体性」、「判断力」、「心身の健康」、「看護の専門性」等が示されている一方で、フォローアップ研修を受ける機会も少なく、その資質や能力を向上することは個々に任されている現状にある。被災地での看護支援活動では、主体的かつ創造的な看護実践を行うための思考力、判断力、行動力や、医療機器などの資源のない中でも臨床推論やフィジカルアセスメントを実践できる技術を高めておくことが重要である。このことから、災害支援ナースが現場で直面する困難に対処できる災害看護の実践能力を向上する教育の機会や教育内容を提供する体制づくりが必要であると考えられる。二つ目に、派遣前から帰還後までの一連の過程で、派遣元である看護協会や所属施設による組織的な支援体制の構築が望まれる。災害支援ナースは、社会的役割の期待が高まる一方で、その存在そのものや役割、活動を十分に理解されていない現状がある。災害支援ナースの派遣元は看護協会（2024年4月1日より各都道府県）であり、所属施設とは異なることから、被災地での活動中や帰還後に災害支援ナースが困難に直面した時に、所属施設からの理解と支援を受けにくい現状もある。また、「自己完結型」の支援を基本とすることから、災害支援ナース自身も周囲に支援を求めることに消極的になる可能性もある。さらに、災害支援ナースは災害派遣医療チーム（Disaster Medical Assistance Team：DMAT）とは異なり、異なる所属からの派遣で初めて会うメンバーとの活動になるため、チームビルディングから必要となる。このことから、災害支援ナースが各時期の困難に直面した時に、問題を一人で抱えず派遣元や所属施設と相談や共有ができる情報ツールの活用や仕組みづくりが必要である。所属先においても災害支援ナースが派遣終了後も日常業務に戻り継続できるように、帰還後も心のケアを受けられる体制づくりが必要である。特に、活動の振り返りや評価は個人で行うのではなく、派遣元が中心となって派遣活動の全体を振り返る機会を設ける必要がある。災害支援ナースにとって、適切に活動を振り返り、心のケアを受けられることは、災害派遣の経験を自身に成長に変え、その後の災害派遣に備えるセルフケアを高めることにつながると思われる。災害支援ナースの「自己完結型」の考え方は自分一人で何事を行うということではなく、派遣前から帰還後も困難に直面する災害支援ナースは周囲の理解と支援を必要としており、組織的に支援する仕組みや体制を構築することが重要である。

結論

災害支援ナースは、派遣前、活動中、帰還後の各時期における支援活動で困難に直面していることが明らかになった。対象文献は51件であり、派遣前は【限られた時間や情報の中での物品準備や心構え】【職場の人や家族の派遣への理解不足】、活動中は【不明瞭な役割や想定外の活動】【限られた期間や資源の中での看護実践の自律】【自己完結型の活動と現場のとの調和】【多職種の役割理解や協働】【過酷な環境下で活動する自身の心身のケア】【現地の看護職の負担軽減】【被災者への関わり】【被災者のニーズの変化に応じた看護の提供】、帰還後は【自身の支援活動の振り返りと評価】【帰還後の自身の心身のケア】のカテゴリが抽出された。

災害支援ナースが直面する支援活動上の困難への備えとして、心身の不調を防ぐためのセルフケア能力を高めることが必要である。また、組織的支援として派遣前から帰還後の一連の過程において、派遣元や所属先との相談や情報共有や心のケアを受けられるように体制や仕組みをつくる必要があり、災害派遣の経験を自身の成長に変え、その後の災害派遣に備えていくセルフケア能力を高めることの重要性が示唆された。

本研究の限界と課題

今回の対象文献は報告書が多く活動の実際を記載したものであったため、災害支援ナースの派遣前から帰還後までの直面した困難についての読み取りが十分にできていない可能性がある。また、災害支援ナースの派遣経験や臨床経験、活動場所や活動内容も様々で、災害支援ナースの背景や活動状況により生じる困難の違いを見出すことが十分にできていない。しかしながら、今回研修を受けた災害支援ナースであっても支援活動上で直面する困難があることが明らかとなり、災害派遣に備えて災害のスキル習得だけでなく、セルフケア能力を高める必要性が示唆された。今後、災害支援ナースのセルフケア能力を向上させる研修内容も検討していくことが課題である。

文献

- 伊藤尚子, 塚田祐子, 鈴木聡子, 災害支援に派遣される看護職へのブリーフィングー「平成28年(2016年)熊本地震」発生時の千葉大学大学院看護学研究科における試みー, 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 2017, 39 : p. 56-63.
- 厚生労働省, 災害支援ナースについて, 令和5年度第2回医療政策研修会及び第1回地域医療構想アドバイザー会議 資料2, 2023. <https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/001146146.pdf> (検索日 2024年5月1日)
- 中川武子, 【東日本大震災～被災地における支援活動の体験～】宮城県における日本看護協会災害支援ナースの活動報告 現地コーディネーターとしての支援, 九州看護福祉大学紀要, 2012, 12(1) : p.13-19.
- 日本看護協会, 災害支援ナース派遣要領, 2014. chrome-extension://efaidnbmnmbpcjpcglclefindmkaj/<https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/saigai/pdf/hakenyoryo.pdf> (検索日 2024年5月1日)
- 日本看護協会, 災害支援ナース活動要領, 2024. chrome-extension://efaidnbmnmbpcjpcglclefindmkaj/https://www.nurse.or.jp/nursing/assets/mhlw_240329_2.pdf (検索日 2024年5月1日)
- 日本看護協会, 活動実績年表, n.d. <https://www.nurse.or.jp/nursing/kikikanri/saigai/chronology/index.html> (検索日 2024年5月1日)
- 西野ひかる, 武田昌子, 加藤万奈, 森沙織, 坪井涼香, 森本妙子, 東日本大震災で災害支援に携わった看護師が体験した惨事ストレスと対処行動, 高知大学看護学会誌, 2016, 10(1) : p. 23-32.
- 野口恭子, 勝原裕美子, 鈴木恵理子, 番匠千佳子, ウィリアムソン彰子, 小笹由香, 小島操子, 細見明代, 東日本大震災被災地へ支援のために派遣された看護師が感じた倫理課題, 日本看護倫理学会誌, 2017, 9(1) : p. 38-44.
- 内山綾子, 「平成23年東日本大震災災害支援ナースへのアンケート」概要, 看護, 2012, 64(3) : p. 59-61.